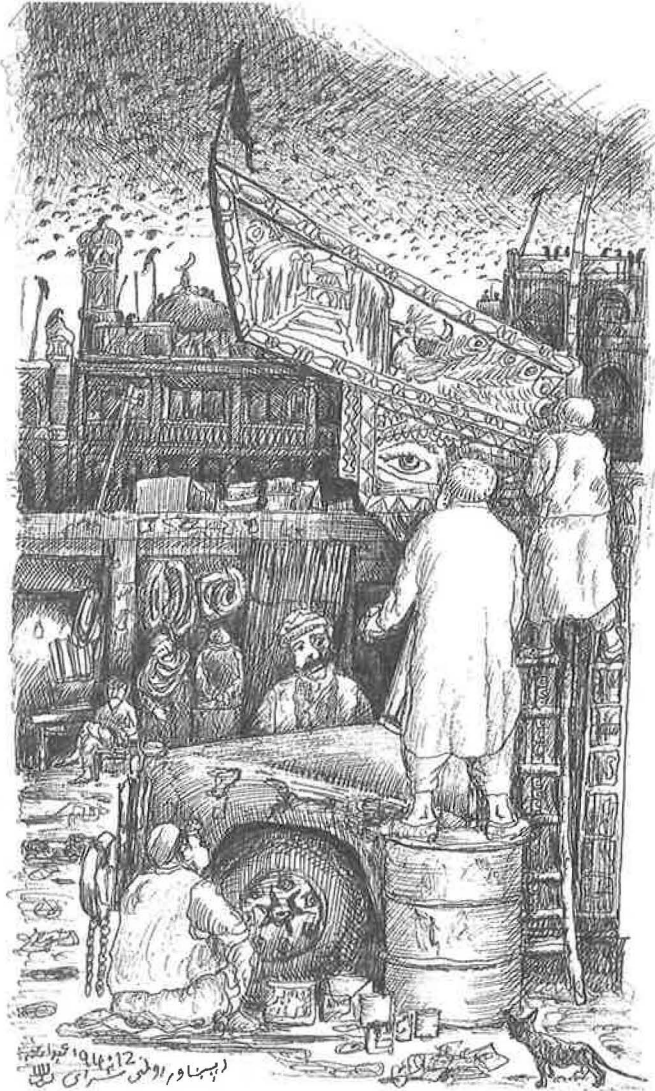


ペシャワール会報

No.42

ペシャワール会
〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)一三三七二



- 自前のらいプロジェクト発足..... 中村哲
- 独自のらい病院建設にむけて..... 村上優
- あわただしい交渉の日々..... 沢田裕子
- 新病院開設までのめまぐるしい一ヵ月..... 藤田千代子
- 銃を捨て人と争わず、病と闘う..... モハメッド・ヤコブ
- 新しい宿舎で二度目の冬..... 豊崎朝美
- もっともっと勉強..... 倉松由子
- 深く印象に残る旅..... 小幡順子

ペシャワール物語 II *表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

光に向かって我が身を放り投げる



●自前のらいプロジェクト発足

JAMS顧問医師・PLS院長

中村 哲

皆様、お元気でしょうか。当地は夜が冷え込み、夏の暑さが嘘のようです。

さて、今年も終わりが近づき、私たちの活動は間もなく十二年目を迎えるようになっています。しかし、情勢の急激な変化に伴って、現地活動は今、重大な転換期にさしかかっていることをお伝えせねばなりません。

ペシャワール会の活動内容については、これまで度々紹介してきた通りですが、

- ①パキスタン北西辺境州のらいコントロール計画への協力
- ②アフガニスタン北東山岳地帯の無医地区農村医療計画

以上の二本立てとなっております。後者②についてはJAMS（日本アフガン医療サービス）がその担い手で、ペシャワール会独自の現地活動母体です。こちらの方はよく知られています。元来の出発点であった前者①の事情はあまり良く伝わっているとは言えません。この「重大転換期」を機に、多少認識を新たにしていきたいと思っています。

ペシャワール会独自の組織

パキスタン北西辺境州のらいコントロール計画

は、一九八四年以来ペシャワール・ミッション病院のらい病棟を基地としてきました。そして、長年の努力の結果、州政府の計画の中で大切な役割を果たすようになったことは、これまでの日本人ワーカーたちの報告などから多少ご存知かと思えます。約百名のスタッフで果敢な活動を展開しているJAMSに比べ、「らい」の仕事は小規模かつ地味であり、ややもすれば影が薄れがちでありました。しかし、日本人ワーカーの大半のエネルギーは実は「らい」に費やされ、現地理解、生身の人間とのふれあいの上で、大きな意味を持ってきたのです。JAMSの活動自体、出発点はらいコントロール計画であり、わざわざアフガニスタンの北東山岳地帯を選んだのも、そこがらいの最多発地帯だという事実があったからです。

現在「転換期」であるのは、このらいコントロール計画への関わりです。これもまた、他団体に拠らず、ペシャワール会独自の現地公認団体、PESHAWAR-KAI JAPANを設立、PLS（ペシャワール・レブローシー・サービス）を中心に展開する事態となりました。病院中心主義から脱皮して、積極的に外にうつて出ようという訳です。というのは、大半の患者が山岳地帯の寒村に住んでおり、ペシャワールのような大都市に下りてくるバス賃



JAMSの院長ドクター・シャワリとPLSの責任者ミスター・ハンフリー（左から2人め、3人め）

さえ持ちません。やつと下りてくるのは、病気が進んで手足のマヒや顔の変形をきたし、とりかえしのつかぬ状態になってからです。また、治療にくるならまだしも、物ごいによる「収入」で生きるためとあつては、私たちの方もしきれぬ思いに襲われます。

この事情は北西辺境州・アフガニスタン共に同様で、州政府ワールドワーカーへの強力な後押しが求められていると言えます。三十七カ所の投薬所が七千名のらい患者の世話をしていと言つても、北西辺境州全体が西日本全部をのみこむ広大な山岳地帯である上、わずか一、二名の診療員で各地の十分な活動ができるとは思えず、「七〇〇〇名」という数字も氷山の一角としか見られませんが。

州政府ワールドワーカー側は、さかんに私た

ちに助力を求めてきました。特に女性たちは村を離れる機会がほとんどなく、男性患者に比べて、その割合が何と二パーセント、これでは「らい根絶」など、とても覚つきません。そこで、私たちペシャワール会としては、これまでの十年の蓄積を生かし、本格的な助力にのりだし始めました。

二十五年を一区切りの計画

このため、去る十月二十二日を以てペシャワール・ミツシヨン病院らい病棟を現地に完全にハンドオーバーし、独自にフィールドワーカーたちの側面支援を撃ち込むべく、自ら「PESHAWAR-KAI JAPAN」の団体登録の公式手続きを行い、準備にとりかかりました。——と述べればいとも簡単ですが、これには一つの決意を要しました。五年や十年そこらで済ませられる問題ではないからです。(申請には「二十五年を区切りとし、らい根絶計画ある限り」となっています) 少し疲れたからと言って、日本側の都合で閉鎖する訳にはいきません。例えば悪いですが、「心中」覚悟でありました。(十二月七日州政府が認可)

しかし、言い方を換えれば、希望を持てばこそ光に向かつて我が身を放り投げたと言えます。実際には、勝算がない戦はしません。構想としては日本・パキスタン・アフガニスタン合同の精鋭チーム(医師・検査技師・看護士など)を編成、手つかずの溪谷に赴いて月に約一週間、定期臨時診療所を開設して滞在する。ほとんどが無医地区なので、マラリア・腸チフスなど一般診療を行いたくなく、らい・結核患者を拾いだす。そうして暫く

同一地区に勢力を集中、ある程度目的を達すれば地区を変え、次々とらい多発地帯の地図を塗りつぶしてゆく——というものです。いわば機動部隊を主力とし、一方でそれを支える自前の基地診療施設をペシャワールに置きます。こうして、最も有効な協力を長期に展開することができるよう。

JAMS・PLS両組織の構造

	ペシャワール会 (日本)	
	JAMS	PLS
現地組織	アフガニスタン関係	パキスタン北西辺境州
対象・地域	アフガン・コミッショナー (パキスタン連邦政府)	北西辺境州／医療・社会福祉省 (北西辺境州政府)
現地担当 行政組織	難民および アフガニスタン内部診療所	主にらいコントロール計画協力
活動内容	アフガン・コミッショナー	北西辺境州政府／社会福祉省
認可機関	アフガン人・日本人	日本人・パキスタン人
主要ワーカー	日本側のみ	日本側のみ
財政支援		

良心とは力

これもまた、JAMSによる「アフガニスタン」と同様、一つの挑戦です。当然、政府のフィールドワーカーたちは大歓迎し、心ある地元の人々が喜んで集いました。中には、長年の地位を捨てて馳せ参じた者もいました。まことに良心とは力です。既に歯車は回り始めました。

協力形態を一新したこのPLSの事業が、JAMSと並んで、国境と民族・宗教を超えた平和・協調の不動の礎となり、事実を以て日本の良心を証しすることになることを祈ります。諸般の方々の御支援を改めて賜れば幸いです。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。らいのコントロール計画を柱にしたアフガニスタンの診療に携わり、共に一九八六年JAMS(ジャバンアフガン・医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。

一九九四年十二月にはらい病院PLSを設立。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』(石風社)『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

独自のらい病院建設にむけて

●ペシャワール訪問記

ペシャワール会事務局長

村上 優

●訪問にいたるまで

一九九四年六月に中村先生かららい診療の拠点をペシャワール・ミッション病院らい病棟より、ペシャワール会が独自のらい病院を建設しそちらに移行させる計画が提案された。七月の理事会で基本的にこの提案が承認されたが、その実現可能性を探るためにペシャワールに交渉団を派遣することになり、私とワーカー経験のある沢田さんと十月十日より二週間現地を訪れた。

十五年ぶりに降り立ったイスラマバードの空港は、昔のままの匂い、空気、人の動きだった。初めて訪れるペシャワールは名物のほこりと力車の排気ガスはなく、前日の雨でカイバル峠まで見渡せるほど澄んでいた。人口百万を超える大きな都市であるが、何処までも下町が続くような造りで、規模の大きさを感じさせなかった。

●交渉を経験して

二週間の旅は中村先生のとどった軌跡を駆け足で追体験したものとなった。十年の彼の働きは、現地の各方面に大きな信頼をもって評価されている。それがあって、北西辺境州政府や州立総合病院、パキスタン全体のらい根絶計画を進めている

マリー・アデレイド・レプロシー・センター(MALC)、そして実際に働くフィールドワーカーとの話し合いが成立している。「事業を持つて事業を養う」と中村先生が常日頃述べているように、よい働きをすれば必ず道はついてくることを実感した。

●新しいらい病院の設立

この訪問で決まったことを整理すると次のようになる。

- ①ペシャワール会が独自のらい病院を設立する。そのために会のパキスタン北西辺境州の現地支部としてペシャワール会ジャパンを結成し、州政府に認可されたNGOとして登録する。
- ②ペシャワール会ジャパンは州政府のらい根絶計画に参加する。
- ③新しいらい病院の役割はフィールドワークを通して遠隔地患者への治療サービスや、女性患者発見をおこなう。またらい菌検査や、急性期の合併症治療などの医療面の充実、アフガン人患者の治療や変形予防の履物配布(サンダルワークショップ)など現地に即した活動である。

●らい病院建設の意味

ペシャワール会はずでにアフガン難民医療のために連邦政府より認可されているNGOであるJAMS(日本アフガン医療サービス)を支えている。

今回はらい診療について、十年の働きを通してこれまで制約が多かったミッション病院から、独自の病院を建設することで北西辺境州全体のらい根絶計画への参加が可能となる。そのために州政府が認可するNGOとして現地に登録されたペシャワール会ジャパンを設立し病院を発足することになる。この病院の活動はおもにパキスタン側に向けられたものである。

ペシャワールというパキスタンとアフガニスタン国境の町で、各々の地域に向けられた二つの独立したNGOを作り、日本のペシャワール会がこれを支えていく。国、民族、部族、宗教、政治など様々な境界線上にある混沌としたこの地で、バランスを保って統合することができるのは、地道



シャワリ先生をはさんと村上事務局長と沢田さん

な活動と現地のニーズにあった支援の継続ではなからうか。その意味でJAMSとならんでペシャワール会の大きな活動のベースを得ることになる。らしい病院設立の意味は果てしなく大きいものに感じた。

●日本側への期待

ペシャワールで会った人々の動きや表情は明るいものである。食べ物や季節の物がならび、街角のチャパティを売る店は活気がある。人は何処にいても各々の幸せを持っている。決して不幸には感じていない。しかし何か起こったら、容易にこの幸せは危機に頻する。その何かの一つが戦争であり、病いである。

現地に行つて戸惑うのは、同じお金が日本で使うときの二十倍から三十倍の価値を持つ現実である。二倍や三倍ではない。それは日本人の努力の賜物でもあるし、それは多くの人々の犠牲の上に成り立っていることでもある。いま日本に期待されているのは湯水のように使う「円」ではなく、困っている人々に本当に届く「円」——援助である。日本から寄せられる募金の積み重ねが大きな事業を動かす力に変わっている。新しいらしい病院の建設には二千万円近くの資金が必要である。私たちにとつても大きなお金だが、現地では五億円以上の意味がある。日本の豊かさを分かちあうこと、それが日本への期待です。

最後に日本人ワーカーの献身的な働きと、JAMSの全面的な協力への感謝を述べたい。この両者がなければ事態は淀み、新しい展開を実行に移

することはできなかったらう。中村先生が始めた事業が、大きく膨らみ実を結び、そして次の事業の種になっていることを実見した。

あわただしい交渉の日々

ペシャワール会事務局(通訳) 沢田裕子

「また皆に逢える。」

十月のペシャワール行きが決まった時、懐かしいJAMSのスタッフの顔が浮かんだ。シャワリ院長、夏に来福したマネージャーのヤコブ。彼の妻ロクシャナは元氣だろうか？ 今も弟のように思える検査技師のヤヒヤは、二年の間にすっかり大人びて、写真ではもう髭をはやしている。ドライバーのムクタールは一度辞めた後、またJAMSに戻っていると聞いた。第三国に移住したり、アフガニスタンに戻ったりと、どうしてもスタッフの出入りが多くなるJAMSで、五年前の半年間、一緒に働いたメンバーもまためつきり少なくなっているだろう、そう思った。

出発の前の晩、成田のホテルにまで仕事を持ち込み、やっと片付けてから、翌朝、村上市務局長と飛行機に搭乗。二度目の時も、三度目の訪問時も、同じことをやっていたような気がして少しうんざり。どうして日本にい

表紙をめぐる小さな物語 5

ペシャワール物語(Ⅱ)

甲斐大策

昼過ぎから描いていた美女の官能的な眼が、完成した。ラフマンは茶にしようと決め、少年に声をかけた。

アフガニスタン西端の古都ヘラトからまだ八、九歳だったラフマンがこのローリー(トラック)・サライに現れたのは十年ほど前である。ヘラトで青い硝子壺を作っていた祖父の工房でラフマンは幼時から編を手伝っていた。炉の小爆発で眼を傷めたラフマンを祖父は、片時も傍から離さなかった。

戦乱時の空爆はラフマンから全ての身内を奪う。ペシャワールでペンキ屋を営んでいた筈の叔父も行方不明で、ひとりこの街へ来たラフマンはローリーに絵を描く親方に拾われたのだった。

筆洗いや下塗りの徒弟を五、六年やったある日、ラフマンが描いた女の顔は親方を驚かせる。

「どこで絵を習った？ 私はいくついう女の絵は描かないが……」誰に見せるのでもなく祖父は、ハイヤムのルバイヤートの一節などを秘かにミナカリ(ミニアチュール)風に描いて楽しんでいた。そんなベルシア風の絵の空気がラフマンに伝っていたのかも知れない。

炉の中で白熱して光る硝子が、祖父の吹く管の先で膨らみながら朱色に、そして青に変わる。隙の裏に残るそんな色をラフマンは、いつもペシャワールの夕刻の空に見るのだった。

ラフマンの視力は年々弱まっている。いつまで描けるのか、ヘラトを再見する日はあるのか、インシャ・アッラー、ラフマンは、ヘラトで城壁の彼方に見ていたのと同じに、果へ戻る何千羽もの鳥の行方を眺める。かつてのラフマンのような徒弟の少年イムティアズが、茶の載った盆を捧げている。

アザーン(祈りの誘い)をききながらラフマンは、大きく息をつき、茶碗に手を伸ばした。



ダラエヌールの対岸の村で診察する中村医師

「^{ワーカー}とこんな働き虫になつてしまふんだらう? しかし、いったん機上の人となつてしまえば、そんなことはすっかり忘れ、想いはもう、ペシャワールへと飛んでいた。」

二年振り、四度目のペシャワールは、カード式公衆電話の黄色いブースが街のところどころに見受けられるのと、ガラス張りのおしゃれな洋服屋が増えていた以外は、相変わらずリキシャがバリバリと音と砂埃をたてて走り、女性たちはチャドルかブルカを被って顔を隠し、男たちは髭をたくわえて民族服のシヤルワール・カミーズを身に纏い、決まった時

間にはアザンが流れていた。焼きたてのナン(素焼きの壺で焼いたパン)、カバール(串焼き肉)、チャブリ・カバール(大判のピリリと辛いハンバーグ)、形は不揃いでも味があつてとても美味しい野菜や果物など、滞在中に忘れずに食べて帰りたいと楽しみにしていた懐かしい食べ物も、バザールに行く私の目と鼻を刺激し、胃袋を喜ばせた。日本人ワーカーの女性三人も元気に仕事をこなしていて頼もしく思った。

懐かしい顔が皆、笑顔で迎えてくれたのはとても嬉しかったが、今回の旅は本当に忙しく、毎日交渉や相談事で息をつく暇もなかった、という大袈裟だが、JAMSやミッション病院の現地スタッフの皆とゆっくり談笑をする時間を持てなかったのが残念といえば残念だった。シヤワリ先生には「サワダさんがペシャワールに来ているのは幻だったのか、と思つていたよ」と冗談を言われてしまった。

ペシャワールでの予定を終えカラチへ向かう私たちを空港へ見送りに来てくれたシヤワリ先生とヤコブ、それに中村先生と藤田さんを交え、ほんの一時、ディーンズホテルの部屋で甘くみずみずしいアフガンのぶどうをつまみながら、やっと話をする時間を持つことができた。相手の腹を探ることも、駆け引きをする必要もなく、ポツポツと話をしながら静かに時間が流れた。必ずしも楽しい交渉ばかりではなかった日々の後の、暖かく、ほっと出来る一瞬だった。十年におよぶ中村先生

の現地に根ざした活動の中で築かれてきた、シヤワリ先生たちアフガン人スタッフと、私たち日本側の人間との間の、言葉に表し難いけれども、友情のようなものがこの部屋の中に満ちている……。緊張が解けたのか、ペシャワールの夕暮れに妙に感傷的になったのか、そんなことをふと考え、胸がいっぱいになってホテルの部屋を後にした。五度目のペシャワールは、いつだろうか。

▶▶ 回覧板 ▶▶

乞う! 関東地区協力者

現在、関東地区には三百人程の会員の方がいらつしゃいます。中村先生の報告会の連絡や打ち合せなど、協力できる方はご連絡下さい。

(前号の告知で何人かの方から連絡をいただきました。現在ペシャワール会関東連絡会〔仮称〕の結成にむけ準備中です。)

【連絡先】服部さん

横浜市保土ヶ谷区境木本町55-21
電話 045 (716) 0117

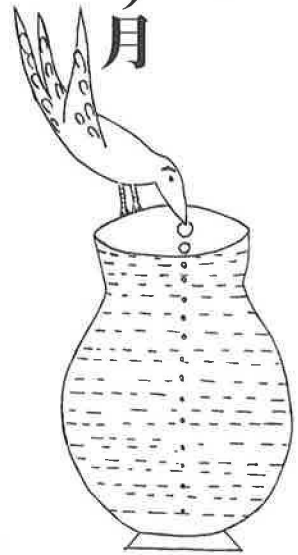
*日本の皆さんお元気ですか? 師走の日本はいかがでしょうか? ペシャワールはもう雨季に入ったのか、よく雨が降ります。

JAMSの方は、十二月十三日、ワマ診療所の四月までの薬品を車二台に満載して、アフガニスタン内に入りました。一週間ぐらいでペシャワールに戻ってくる予定です。またシヤワリ先生にPLSのことを色々気にかけて貰って助かっていきます。

〔ペシャワール・豊崎〕

新病院開設までの

めまぐるしい一ヶ月



PLS (ペシャワール・らいサービス) 看護婦

藤田千代子

予想されていたことではあったが、めまぐるしい一ヶ月だった。事態がやや急に変化したので、大急ぎで新しいペシャワール会自前の病院整備に追いまぐられた。この季節には大勢の患者がペシャワールにくるので、治療の場がなくなるからだ。新しい全くのゼロからの準備である。まずは二週間JAMSの一角を借り、その後新診療所へ移った。

まず一時的にJAMSに間借りし、患者の傷の手当ての材料から準備、治療可能な状態を整え、カルテ、机、マツチ、石けん等と、一つ一つ買いそろえる必要があった。何とか四、五名の患者をみれる準備が出来た頃、中村先生より、「二、三日中に場所を、JAMSから移す」との達しがあり、大急ぎで準備にかかった。理学療法士の倉松さん、看護婦の私、アシスタント二名、くつ職人一名、そのアシスタント二名だけで、食事、配薬、リネン関係、JAMSの助けを借りて行った。しかし、パキスタン人がJAMS(アフガン人)

では、働きにくい事やパキスタン人のらい患者も、州政府の職員もJAMSへは、来づらい事も感じていた。私には、本当に、理解しにくいパキスタン人と、アフガニスタン人の確執……。

不安を訴える私たちに、「足りない所は、自分でする」との中村先生のきつい言葉に、自分の大変さしか考えていなかった事にハッとする。他にも理由はいろいろあると思うが、とにかく患者が治療に来やすい場所、スタッフが働きやすい場所、らいに関係している人達が訪ねやすい場所が必要なのであった。移すと伝えられてから、一週間後、十一月十九日、患者も、ベットごと、引越した。

新しい建物は、前後に庭があり、表側の庭を男性患者、裏の庭を、女性患者が使えるように、完全に分け部屋割りを決めた。移って早速患者達はバナナの本がありバラの花の咲いている庭に出ているのびりすわったり散歩したりしており、なかなかいい光景で、これだけでも移ったかいがあったなど、感じられた。

傷の治療などは、JAMSにいる時に準備出来ていたもので、さっそく開始出来たが、のんびりはしておれない。場所を移ったと知れば患者が集まってくる事は、目に見えている。ミッシオン病院からも患者達が様子を窺いに來、「ミッシオン病院から、バスでたつた二ルピーで来れる」と言っ

て帰って行った。三十床を準備することになった。中村先生の回診で、手術の予定も入り、ビックリとする。手術室に何もないのである。今、思い出してもいつ何を買いに行き、何をしたら良く覚えていない。

一人のアフガン人のアシスタントが「今日は、昼から休みがほしい」と言ってきた。(この人はアブドゥラと言つて、私達がミッシオン病院を出る迄らい病棟に入院していて、患者達の御用聞や私達のちよつとした用事を、手伝ってくれていた人で、今回、ミッシオン病院を退院して、私達のスタッフとして、仲間入りしたのである)。「休みを」と言われて、気がついたが、彼は一ヶ月程休んでいなかったのだ。病院内に住んでいるので夜も、患者達の世話をしているようだ。私はくたびれてしまつと、わりとあつさり休むので、アブドゥラには、頭の下がる思いがした。

こういう事もあった。移つて、十日程すぎた頃、患者が「シスター、シャツがすごく汚れて来たから変えてほしい」と、訴えた。でも私達にシャツの予備がまだ一枚もなく、今使っているのもJAMSからの借りものだった。「汚れは、あなたを殺さないから、もうしばらくがまんして」。患者達も、毎日運び込まれて来る荷物や、バタバタし

ているスタッフを見て、今の状況を知っているの
で、訴えた患者は、同室者達から、何やらかんや
ら（パシュトゥ語の意味がわからなかった）と、
言われていた。三日後、「シャツが臭くて、気持
ちが悪く吐気がする」と再び訴えるのを見ると、
本当に、真黒で鼻がまがる程くさい!! 何と、三
週間以上シャツ交換をしていなかったのである。
大笑いし大急ぎではいで、JAMSへ洗たくに持
って行ってもらおう。

こんなどたばたの中で、外来患者が、ポツポツ
来院、入院患者も増え、ドクターの回診も始まり、



らいの患者さんを治療する藤田さんと中村先生

夜勤も始まり、手術も小さいながら始まり、ベシヤ
ール会ジャパンの新しい病院PLSが、静かに
少しづつすべり出している。

〔余談〕

十二月一日、新病院の庭で茶話会が開かれ、ミ
スター・ムラー、シャワリドクターとJAMSの
スタッフ数名も列席されました。中村先生のあい
さつの後一人ひとり、自己紹介をすることになっ
たのですが、恥しがってしなかった人もいる中、
アブドウラが、「私は以前、ミッション病院に患
者として入院していました。今は、ここでドク
ター・ナカムラと、仕事をします」と、堂々と、
話した時は胸がつまり涙が出ました。また、JAM
Sのスタッフであり、今回、私達の仲間入りし
た（と、私は、思っていたのですが）ダウラットが、
「私は、JAMSのスタッフです! 後、二、三
日したら、JAMSへもどりたい」と、大きな声
で言ったので、大笑いしました。中村先生はパシュ
トゥ語で次のようにあいさつされました。

「アフガン人もパキスタン人も、日本人もイス
ラム教徒もクリスチャンも仏教徒もヒンズー教徒
も、皆、同じ人間である。ここには、こうした人
達が集まっている。今、アフガニスタンもパキス
タンも、争いがある。日本もそうである。世界は
まるで砂漠である。しかし、「らい」に国境も民
族も宗教もあらゆる垣根がないように、我々の仕
事もあらゆる対立をこえてある貴重な、人間の事
業である。ここを、一つのささやかなオアシスに
しよう——。」

●スタッフを紹介します。

- Dr. 中村（院長）
- Mr. ハンフリー・ピーター（総務責任者）
- Dr. ラビア（眼科・内科医）
- Dr. ナジール（皮膚・内科医）
- ヒダーヤット（らい診療員）
- ダウラット（准看護師）
- サルダール（准看護師）
- サダーカット（助手）
- アブドウラ（助手）
- 倉松（理学療法士）
- 藤田（看護婦）

- ムザファル（門衛）
- ラフマット（〃）
- ミルザ、モハマド（庭師）
- ヌール・モハマド（ヘルパー）
- モリマド・ダウド（〃）
- モルタザ（くつ職人）
- グラムハイダー（くつ職人助手）
- ファリード（〃）
- カンジャン（運転士）

銃を捨て人と争わず、病と闘う

承前



JAMS (日本・アフガン・医療サービス) マネージャー

モハメッド・ヤコブ・サーフイー

ヤコブ ヌーリスタンは本当に貧しい地域でして、皆の生活も始められたばかりです。ヌーリスタンで薬を買おうと思ったらルピーで二百から三百(六〇〇円〜九〇〇円)するんですね。やはり貧しい人達にはとても買える額ではないんです。クリニックを開いてからは毎月そこまで薬を運んで患者さんの検査も続けています。現地には本当にたくさんの方の病気があります。私は専門家ではないので詳しい話ができないのが残念ですが、皮膚病もありますし、下痢、マラリア、チフスといった病気がまだまだ蔓延しています。ですから現地の人達は我々がクリニックを開いたことをたいへん喜んでいきます。このあいだも八十歳になるおじいさんから話を聞いたのですが、「今までに医者や薬を見たことがあるか。診療所があったようなことはあるか。」と尋ねましたら「八十年生きてきたが医者も薬を見たことなどないし今回が初めてだ。」とおっしゃっていました。もう一つ付け加えたいのですがワマ地区の診療所では毎月五千人ほどの患者さんを診ています。

ガラエヌールの建物も以前はとても小さい建物だったんですが我々の医療活動には少し不十分だということで、もつとじょうぶでいい建物に代えました。これはある村人が自分の土地を提供する

からペシャワール会の援助で病院を建ててくれ、といって土地を下さったのですが、これは完成までおおよそ二年かかりました。あちこちで戦闘が起きていましたから建物の資材を集めるのがとても大変でしたが、日本からの援助のおかげで完成までこぎつけることができました。今ではヌーリスタンのJAMSのスタッフ達は自分たちのクリニックで活動できるようになっています。

無医地区へ

中村先生がよくおっしゃるのは、医者のいないところに行かなければならないということです。いろんな人達が援助していて誰でもクリニックを開ける大都市ではなく、医療の恩恵を受けることができる無医地区に行くことが重要であるということなんです。アフガンの人々はまだまだいろんな問題を抱えていますけれども、現在の皆さんの助けが続いてアフガンの人々が幸せになっていけばと思っています。私達のやっている活動は大変小さなものかも知れませんが、アフガンの人々にとっては大変大きな援助だといえると思います。なぜならヌーリスタン、ガラエヌール、ガラエヌールといった地域の人々はいままで援助を受けたことがなかった、だからこそ喜んでいるのだと思います。

ます。

中村先生のこと

話は少し変わりますが、次は中村先生のことについてお聞きしたいと思います。中村先生は日本にいるときよりもパキスタン、アフガニスタンにいるときの方が非常に生き生きしているように見えるのです。ヤコブさんは中村先生に会う以前に日本人にお会いになったことがあるか分りませんが、中村先生に対する率直な感想をお聞かせ頂ければと思います。

ヤコブ どう表現して良いのか自分でも分からないのですが、中村先生がアフガンあるいはパキスタンにしてくれたことを言葉で表現するのは大変難しいことだと思います。しかし特にアフガニスタンの人々のために中村先生はたくさんのことをしてくれました。よく中村先生は私におっしゃるのですが日本も第二次世界大戦後、同じような状況にあったんだ、ということをよく話されます。日本だって今でも中村先生のような医者の助けが必要だろうとは思っています。しかし日本にはたくさん医者がいますし、医療施設も充実していますけれども、アフガンはやはり日本に比べて医者も施設も少ないのです。ですから中村先生はアフガンで活動してくださっていることはとても重要なことなのです。私自身、中村先生のようなお医者さんに会ったことがありませんし、外国人がアフガンでこういう仕事をして何の問題もなくここまでやってきた人を初めて見ました。先生が疲れたとか患者はもう診たくないなどとおっしゃるのを聞いたことがありませんし、本当によく働いておられます。だから私が神に祈るときには先生の

長寿と健康を祈るのです。そして本当に貧しい人々、難民キャンプで暮らしている困難な状況のなかにいる人々のために働いてくださっている中村先生に感謝しています。

国を再建するとき

——ところでヤコブさんは非常に勇敢なムジャヒディン（イスラム戦士＝反政府ゲリラ）だったというふう聞いています。それで最近現地ではJAMSの車輛が武装集団に強奪されるという事件が起こったときに、ヤコブさんが「今は人と争うことが目的ではない。我々は病と闘うのである。」とおっしゃったそうですが、私たちはその言葉を聞いて非常に感動しました。私たちはJAMSの兵站部だというふうに自覚しているんですけども、いわば前線で病気と戦っている人達と共に、そちらの言葉でいう「ジハード」（聖戦）を闘っているんだと思っています。

ペシャワール会の会員は私たち事務局だけでなく日本中に現在三千人を超えており、JAMSを支援しています。ぜひそのことを知っておいていただきたいということ、我々もできる限りのことは致しますので、ぜひ無理なさらずとにかく命を大事にして一緒に頑張っていきたいと思います。ヤコブ ありがとうございます。私は日本の友人の方々のように一生懸命働いているような人間ではありません。私は単純なだけの男でただアフガンのために働いているというだけなのですが、おっしゃるとおり、九年間ムジャヒディンをしておりました。旧ソ連がアフガニスタンを占領して

りましたときにはカラシニコフという銃を持って戦っていました。しかしその後銃は捨てまして、国を再建するべき時がきたと思ってペシャワールにやって来たわけです。それからシャワリ先生や中村先生の助けをうけて英語やコンピュータの勉強をさせてもらいました。今になって思えばこういった勉強をさせてもらい、本当に良かったと思っています。

残念なことに車が二台、八月二十四日に盗まれてしまったわけですが、そのときもスタッフの中には銃を持って盗賊と戦おうとしたものもいました。しかし私は、今は人間どうしがたたかうときではない、病気とたたかう時なんだと言ってそれを止めました。それで今、銃を持たずに事の解決を図っているのですが実際に車が戻ってくるかどうかは私もまだわかりません。

とにかくペシャワール会の皆さんには本当に感謝していますし、これからも援助を続けていただけるようお願いしています。これまで皆さんがしてくださったこと、そしてこれから将来皆さんがしてくださることは決して忘れないと思います。それにJAMSがやっていることに對してアフガンの人達も大変感謝しています。みんな神に祈りを捧げるときには日本の人々、あるいはペシャワール会の皆さんの長寿を願い、幸せを祈っています。それからJAMSの将来は、ひいてはアフガンの将来につながる仕事だと信じて仕事をしているのですが、私という人間が特別重要だということはないと思います。私がいつか死んでしまえば私に代わる人が出てきて私よりもっと良い働きをする

かも知れません。それに、死ぬときが来ればそれは私の運命ですから、それはそれで幸せに受け止めようと思っています。そしてまた次の人生でも同じように生き、同じように死にたいと思っています。そのことは他の良心的なアフガン人のスタッフのほとんどが考えていることだと思います。

——すばらしいメッセージをありがとうございます。私たちペシャワール会のメンバーはアフガンの人々やJAMSに対して「援助してあげている」という意識はほとんどないと思います。むしろこの活動を通じて得るもののほうが精神的な意味で非常に大きいと思います。やはりそれは日本人の心が貧しくならないためにも必要なことだと思っています。必ずこのメッセージは会員にも伝えま

す。ありがとうございます。

最後に、今回日本に初めて来られての印象はどうでしたか。

ヤコブ 大変興味深い数日間だったんですけども妻も私も楽しい思いをさせてもらいました。福岡周辺などいろいろな見せてもらい、どう表現してよいか難しいのですが、本当に町へ行ってもどこ静かで、みんな国のために働いているなあ、という印象で、これは今回日本にきて自分が知った重要なことです。（祭するに、戦争で何もかもが破壊され尽くしたアフガンと比べ、人間どうしが表面的には争いあっている日本はどこか静かで、「国のため」みんなが働いているという印象を持たれたのだと思います。）

——ありがとうございます。

●ワーカー通信

新しい宿舎で二度目の冬

JAMS事務担当 豊崎朝美

日本人ワーカーの宿舎の住所が変わりました。十二月上旬に引っ越しを予定していたけど、十月二十二日に急に早まり、あたふたと荷物をまとめ慌ただしく引っ越ししました。引っ越し当日は屈強なJAMSのスタッフが何人も手伝いに来てくれ、次々に荷物を運びだし、あつという間に新しい家へ運び入れました。私は何をしていたかと言うと、忙しく動き回っているスタッフを、山と積み上げられた荷物の隙間で所在なげに立ったり座ったりしながら、ボーと見ていただけでした。それまで住んでいた所は、ミッション病院の敷地内にある社宅で、イギリス統治時代に造られた百年程たった建物で、当時は将校が使用していたそうです。天井が高く、日本の一般家屋の一・五階分程の高さです。また壁も厚く、夏は他の比較的新しい住宅に比べる

と、屋内は涼しく過ごしやすかったです。庭も広く、季節の変化と共に庭の花も変わり、冬の小春日和の午後には、暖かい日差しを浴びながら、庭で読書を楽しんでいました。今回引っ越した家は、Japan-Afghan Medical Services JAMSの近くにあるJAMSのスタッフハウスの二階で、場所は小さいな家が立ち並ぶ静かな住宅街の一角です。部屋の間取りは次の絵のようになっていました。

それぞれの部屋に色々特徴があります

藤田の部屋—広い窓から日が入り冬は暖かいが夏は無茶苦茶暑い

感想（落ち着いた部屋で気に入っている）

倉松の部屋—一番広い部屋でベランダ付き。

しかし洗濯機をこの部屋にしているの、人の出入りがある感想（広い部屋で嬉しい。でも蚊がたくさんいる）

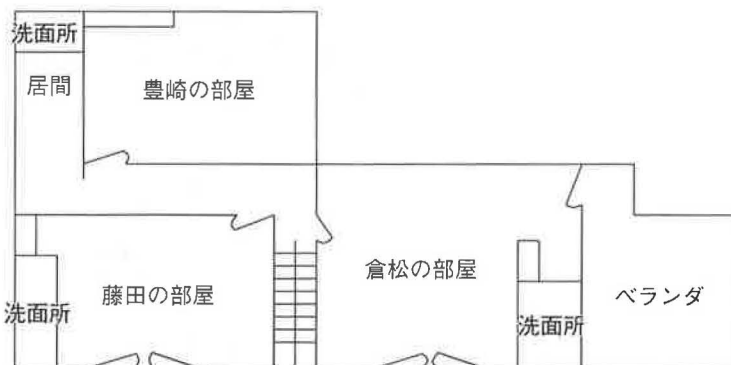
豊崎の部屋—窓が無く昼間も薄暗い。しかし

夏は比較的涼しく過しやすい感想（洗面所に浴槽がついているのが嬉しい）

居間に小さな台所を付けて貰ったり、床に

カーペットを張って貰ったり、カーテンを付けたりと、少しづつ部屋らしく居心地良くなり、落ち着いてきています。一階には中村先生の部屋、絨毯を織っている部屋、そしてJAMSのスタッフが使用している部屋があります。

新しい住居の居間で家の前を通るタンガ（馬車）のカタカタという音を聞きながら、ペシャワールで二度目の冬を迎えようとしている今日この頃です。



もつともつと勉強

承前

ペシヤワール会ジャパン 倉松由子

患者と医療者という関係の中で

——実際に患者さんたちと接していて、接すること自体は楽しいですか？

K それは楽しいですね。

——仕事で気持ち落ち込まないでいられるというのが不思議なんですけど、考えたらず患者さんたちと生き生きとしたぶつかりあいができるからかもしれませんね。そんな中でうまくいなくても、裏切られたという感じはしないんですよ。

——患者と医療者という関係の中ではいろいろと目に見えない問題があるけれども、人間同士の関係の中では非常に喜びを感じているみたいですね。この前の会報（40号）の中のお婆さんの話とか、そういうこと自体には魅力を感じているようですね。

K 粗野であるけれども素朴な人達なので、もし私と違う意見であっても、その人がおか

れている状況がわかると「ああ、なるほどね」と理解できるんですよ。

こつちから見ると、一見、無茶苦茶な意見が出てきても相手の立場に自分を置き換えてみると、そういうのも無理ないなとか思えるんですよ。

——実際に患者さんとのやりとりの中で印象に残ったことを教えてください。

K 患者さんで踝くるぶしのところに傷のある人がいたんですね。お祈りの時にひざまずくところ、傷があたらないようにしなさいと言ったところ、「そんな些細なことでお祈りの形式を変えられるか」と言うんですよ。でもよく調べてみるとコーランの中には病人が病気を悪くするような宗教のやり方に固執しろとは書いてなくて、病人はこうしてもいいとか、こうしなくてもいいとか、わりと具体的に書いてあるんですよ。それで、そのことを言うとして素直に納得して、ころつとかわつちやつたりしてね、そういうことがあるんですよ。

負けてもがっかりしない

例えば日本でけんかすると理屈の言い方のうまい人が勝ったり、根回しのうまい人が勝ったりとか、本質と違うところで勝負が決ま

ったりするでしょう。でも患者さんと話しているとそういうことはあんまりなくて、どつちが自分の意見を真剣に抱いているかというところで勝ち負けが決まるというところがあるんです。だから負けてもあんまりがっかりしませんね。

——今まで「負けた」というのがたくさんあったわけですか。

K だって向こうのほうが強くないですか。頑固さとか。

——自分が思っている状況にならないときって、私が悪いんじゃないかしら、私が思い違いしているのかなとか、考えるじゃないですか。すぐに自分を振り返って反省したりしませんもの。あの人たちは。



新しいらい病院（PLS）に立つ倉松さん

私なんか一通り自分のことを振り返って、点検して安心して「あー、私は悪くないんだ」と思ってから相手に向かつていくけど、そういうのがないんですよ。

——そうすると、日本でのように根回しをしてどうのこうのというようなことはあまり必要でないわけですね。

K 患者さんと一対一で話すときは必要ないですね。

ただ、相手のおかれている状況は相手の言葉だけじゃわからないから、家族関係とかをそれとなく調べたりはしますけどね。それはどうしてかという、私のほうが患者さんより立場が強いわけですよ。だからそういう言葉だけで判断してしまうと、相手のことを抑圧してしまうことになるんです。それで、そういうことのないようにこちらが気をつけて調べないといけないんですね。

それを除けば、よいいなことを考えないで真っ向からぶつかってもどうかなるし、私のほうが負けたとなればはつきり「私が負けたから」と言えば相手は許してくれるしね。

フィールドワークのこと

——話は変わりますが倉松さんはフィールドワークには行かれたんですか？

K 去年何度か行きましたけど、私はレプロシートクニシヤンではないし、分野が違うのであんまり出る幕がないんですよ。でも一度、フィールドワークについていったときに州政府の人と話して、「わあ、私こんなにウルドゥ語がわかるようになったんだ」と思ったときがあったんです。それはまあ簡単な状況説明と調査の依頼みたいなものでしたけど、とても嬉しかったですね。言葉はやっぱ日本人で固まっていたらだめなんだなと思いましたね。

——藤田さんの話では、女性が男性の体に触れちゃいけないという宗教的なものによる苦勞話がありましたけど、倉松さんの場合、どうでしょうか。やはり女性の患者さんのほうがやりやすいですか？

K それはもちろんね。女性だったら理由があって触る分にはどこ触ってもいいわけだし。

毎日やってる運動訓練では手先、足先だけなので性的に問題がある領域ではないですね。それに目的があって触るわけだし。例えば曲がらない親指を触って曲げるようにするとか、

目的と意味がはつきりしているわけだから問題はなないんです。それで、私は目的と意味をもつて必要最小限で触ってますけど今のところ問題は起こってないですね。もしかしたら

起こってるのかもしれないんですけど。

あと、患者さんがベッドの上に寝てて、腰などを触らなければいけないとき、最初、どうしようかなと思ったんですけど、しようがないから枕や木の枝をもってきて代用したりしてます。それか、動く人を連れてきて、ここをこんなふうに押さえるとか言わせてさたりね。

日本では、手先足先よりも体全体の訓練をやっていたんですよ。末梢のところより腰とか肩とか体全体をべたべた触ってやっていたから、自由に触っていいんだったら、もったいろんなことができるようになあとおもいますね。——もつとこうしたいというのはたくさんあるでしょう。今度行ったらこうしたいというのを教えてください。

K まだ具体的にはなくて、とりあえず言葉のことで、あと、フィールドワークに行った時に、今は何もできないんですよ。だから、いろいろのこともつとよく勉強して女性のらしいの患者さんをチェックできるようにしたいですね。

——今日は現地で働く人の苦勞の一端を知ることができました。どうもありがとうございました。（おわり）

●ペシャワール訪問記

*

深く印象に残る旅

久留米大学病院看護婦

小幡順子

九月二十九日より十二日間の休暇を利用し、ペシャワールに行ってきました。日本の初秋と同じく、過ごしやすい季節でした。滞在中は、ミツシヨン病院敷地内にある寄宿舎で日本人ワーカーとすごしましたが、生活を共にしながら、活動内容、生活習慣の違い、今かかえている問題などいろいろ聞くことができました。

滞在中は、毎日らしい病棟に足を運び、看護婦の藤田さん、理学療法士の倉松さんと共に行動しました。藤田さんは、夏休みのため一時帰国されていましたが、私が到着した三日後に着かれ、病棟では「待っていました」とばかりに迎えるスタッフと患者さんの態度を見て、信頼関係の深さを感じました。

一日の仕事としては、傷のケアから始まり、その後は患者さんの状態や、外来の患者さん

の状況をみながら、治療、看護にあたっていくのですが、患者さんも現地スタッフも話し好き（充実したコミュニケーション）であったり、処置のため訪室すると、お祈りの最中と重なったりで、おらかな性格でないやっつけていけないのではないかと感じました。

男性スタッフ、患者に対する態度にもとまどいを感じました。宗教上結婚相手以外の異性に対してあまり親しくはいけないとの由で、「あいさつは敵意をもたせないようにさちん」と行う。ニコニコする必要はない。患者さんの体にも、傷以外の所には触れない方がよい」と注意を受けていましたが、長年の看護生活の中で培ってきた「営業スマイル」が思わず出てしまったり、ギブス巻きを終えた患者が移動しようすると、支えようと手がのびてしまうのでした。

しかし、女性患者さんの所に行くと、廊下での井戸端会議に加わりニコニコ…。患者さんは私が言葉がわからないのを承知で、いろいろ話しかけてくれて楽しい時間をもつことができました。ちなみに、私の頭をよくんでいた女性患者さんは私を「男の子」と思っていたようです。女性部屋は二階にあり、窓



JAMSのスタッフと共に(左から二人め)

からは、外の風景の一部をながめることができます。女性だけでは外出がむずかしい土地柄、病棟と寄宿舎の往復の中で、ペシャワールのほこりと力車やバスの騒音を感じることができたため、毎日一回はこの場所に立つて外をみていました。

病棟横に設置されたワークショップでは、ちよつと驚きました。現地の人たちは、アバウトに事を進めて行くように思っていました。ここで作られているシューズは、患者さんの足にフィットし、丈夫な仕立てになっており、山岳地帯の人にはブーツ型を、手が硬縮した人にはマジックテープで簡単に取りはずしできるサンダルなど工夫されて作られて



募集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMS と PLS では日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々をの便をを図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象:

1. 医療技術者(医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語(英語又は現地語)の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。

- ② ワーカーは、現地で1カ月、ベルシャ語またはバシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。

- ④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。(繁忙期には断ることもあります)

詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440〔分室〕

いました。

短時間ではありましたが、JAMSの見学もすることができました。腸チフスやマラリアの患者さんの入院もあり、「お国柄の違い」をここでも感じます。シャワリ先生の部屋に通されて、一番に目に入ったものは、「本来無一物」と書かれていた色紙で、いまでも印象に残っています。

話は変わりますが、私が初めてらい患者さんに会ったのは六年前のインド旅行の時です。さしのべられた手からは、浸出液が悪臭をはなち、思わず身を引いてしまった私は、自分のいやな部分をみたようで、罪悪感がありました。が、そういう思いも忘れていた頃、中村先生の活動を知り、共感をおぼえたと同時に、あの頃の思いもよみがえってきました。

短期間の訪問ではありましたが、滞在中は

物質的な進歩が人間の幸せを保証するには不十分であることを痛感したり、中村先生が本の中で書かれていた「人間に必要な物は、そう多くもなければ複雑でもなく、時代と所を超えてある」という言葉に納得し、自分の立場でどう受けとめるべきか考えるよい機会となりました。

私は、大学病院に勤務して十三年目ですが、経験を重ねるごとに矛盾や疑問を多く感じるようになりました。何がいいことで悪いことなのか一概には言えないのですが、どこで看護を行おうと人が必要としているものは同じではないかと思いました。

今回訪問した際、中村先生は、風邪と腰痛にて体調がすぐれない中、新しいプロジェクト

のため、多忙に走り回っていらつしやいました。帰国すると、新しいプロジェクトが急展開され、日本人スタッフのことが少し心配です。なぜ「少し」かと思われるでしょうが、現地でお会いして、そのタフさと真の強さを感じ、「あの方たちならだいじょうぶだろう」という思いがあります。

今回の訪問に際して、中村先生、藤田さん、倉松さん、豊崎さん、現地スタッフの皆さん、ペシャワール会事務局の皆さんには、多大な御迷惑をかけたにもかかわらず、親切に訪問を受け入れていただき感謝しております。

シャワリ先生、ヤコブさん、夕食の御招待、ありがとうございました。

●事務局だより

*中村先生の報告にありますように、十二月一日、らいコンントロールを主目的とした自前の病院がオープンしました。ミッション病院での十年の蓄積を踏まえ、州政府をはじめとする諸機関との強い協力関係のもとでのスタートです。JAMSはアフガンに完全な平和が訪れる日にはアフガン国内に移るべきものですが、PLS（ベシャワール・レプロシー（らい）・サービス）はベシャワールに根を生やして、パキスタン北西辺境州で活動するプロジェクトの基地になるわけです。会員の皆さんの強力なご支援をお願いいたします。

*今年の秋もマリリアのフィールドワークを行ないました。昨年の全国からの支援による治療活動の結果が、今年の発生は激減したようです。今後も継続的にマリリアのフィールドワークを続けます。ありがとうございました。

*会員で福岡在任中（一九八六—一九九〇年）は、事務局員として活動していた沼沢均共同通信ナイロビ支局長が亡くなりました。ゴマに派遣されているルワンダ難民救援の自衛隊取材に向かう途中の飛行機事故でした。北大の探検部出身で飾らず剛毅な人柄は、みんなに慕われていました。三十六歳の突然

の死は、不意打ちを喰らったようで、ただただ無念です。カンボジアの石松医師からも沈痛な電話がありました。交わす言葉もありませんでした。ご冥福をお祈りします。

〔〇村から〕

※ワプロダメ。英会話もちろんダメ。本場に「フツ」のおばさん。が、熱意だけで、ベシャワール会に飛び込んで、早三年半が過ぎようとしています。当初、暖かで素晴らしい若者に囲まれながら、仲間（五十五才以上のおばさん）がいないということ、なぜか一抹の淋しさがありません。

でも、今では、仲間が五人になり、若い人達からは、「おばさん軍団」と恐れられるまでになりました。

主な仕事は、会費や寄付をお送り下さった方々へ、お礼の葉書を書く事と、会報の発送準備です。特に後者の様な単純作業になりますと、おしゃべりの方も盛んになり、「おばさんの特技」発揮の場となります。

「同じ一つの目的」を持って、心をひとつに寄せ合う仲間の集りは、とても楽しいものです。行ってみよう！と迷っていらつしやる方。思い切って事務局に来てみて下さい。大歓迎！です。（乃）

ドラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何かを根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大名一—二一十五
電話 〇九二（七一四）四八三八

ベシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社

福岡市中央区大名一—二一十五
電話 〇九二（七一四）四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一一〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二—六—四
電話 〇三（五六八七）二六七〇

会 則

①本会の名称をベシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の理事を選任し会の運営を行う。

⑧役員の改選は毎年総会にて行う。

⑨毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑩本会の事務局をFARA HOUSE
（〒八一〇 福岡市中央区大名二丁目一〇—二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二—二三七二）内におく。